

Ⅱ期(一般)

令和二年度 武蔵野大学 専攻科

言語聴覚士養成課程

入学試験問題

(一月十二日)

「国語総合」

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

『無常という事』

「或云、^{あるひといはく}比叡の御社に、いつはりて^{ひえい} * かななぎのまねしたる * なま女房の、^{ひやく} * 十禅師の御前にて、夜うち深げ、人しづまりて後、ていとうていとうと、つゞみをうちて、心すましたる声にて、とてもかくても候、なうなうとうたひけり。^{その}① 其心を人に * しひ問はれて 云、生死無常の有様を思ふに、此世のことはとてもかくても候。なう * 後世をたすけ給へと申すなり。云々」^{うんぬん}

これは「一言芳談抄」のなかにある文で、読んだ時、いい文章だと心に残ったのであるが、先日、比叡山に行き、山王権現の辺りの青葉やら石垣やらを眺めて、ぼんやりとろろついていると、^{突然}、この短文が、当時の絵巻物の残欠でも見る様な風に心に浮び、文の節々が、まるで古びた絵の細勁な^アピョウセンを辿る様に心に滲みわたった。そんな経験は、はじめてなので、ひどく心が動き、^{坂本で} * 蕎麦を喰っている間も、あやしい思いがしつづけた。あの時、自分は何を感じ、何を考えていたのだろうか。今になってそれがしきりに気にかかる。無論、取るに足らぬある幻覚が起ったに過ぎまい。そう考えて済ますのは便利であるが、どうもそういう便利な考えを信用する気になれないのは、どうしたものだろうか。実は、何を書くのか判然しないままに書き始めているのである。

「一言芳談抄」は、恐らく兼好の愛読書の一つだったのであるが、この文を「徒然草」のうちに置いても少しも^イ遜色はない。今はもう同じ文を眼の前にして、そんな詰らぬ事しか考えられないのである。依然として一種の名文とは思われるが、あれほど自分を動かした美しさは何処に消えて了ったのか。消えたのではなく現に眼の前にあるのかも知れぬ。それを掴むに適したこちらの心身の或る状態だけが消え去って、取戻す術を自分には知らないのかも知れない。こんな子供らしい疑問が、^ウステに僕を途方もない迷路に押しやる。僕は押されるままに、別段反抗はしない。そういう美学の^エホウガとも呼ぶべき状態に、

少しも疑わしい性質を見付け出す事が出来ないからである。だが、僕は決して美学には行き着かない。

確かに空想などしてはいなかった。青葉が太陽に光るのやら、石垣の苔こけのつき具合やらを一心に見ていたのだし、鮮やかに浮かび上がった文章をはっきり辿った。余計な事は何一つ考えなかったのである。どのような自然の諸条件に、僕の精神のどの様な性質が順応したのだろうか。そんな事はわからない。わからぬ許りばかではなく、そういう具合な考え方がステに一片の洒落しやれに過ぎないかも知れない。僕は、ただある充ちみ足りた時間があつた事を思い出しているだけだ。自分が生きている証拠だけが充滿し、その一つ一つがはつきりとわかっている様な時間が。無論、今はうまく思い出しているわけではないのだが、あの時は、実に巧みに思い出していたのではなかったか。何を。鎌倉時代をか。そうかも知れぬ。そんな気もする。

歴史の新しい見方とか新しいカイシヤクとかいう思想からはつきりと逃れるのが、以前には大変難しく思えたものだ。そういう思想は、一見魅力ある様々な手管てくだめいたものを備えて、僕をオソもつたから。

③一方歴史というものは、見れば見るほど動かし難い形と映つて来るばかりであつた。新しいカイシヤクなどでびくともするものではない、そんなものにしてやられる様な脆弱じやくじやくなものではない、そういう事をいよいよ合点して、歴史はいよいよ美しく感じられた。晩年の鷗外がコウシヨウカカに墮おしたという様な説は取るに足らぬ。あの厩こ大なコウシヨウを始めるに至つて、彼は恐らくやつと歴史の魂に推参したのである。「*古事記伝」を読んだ時も、同じ様なものを感じた。カイシヤクを拒絶して動じないものだけが美しい、これが宣長のりながの抱いた一番強い思想だ。カイシヤクだらけの現代には一番秘められた思想だ。そんな事を或る日考えた。又、或る日、或る考えが突然浮かび、偶々たまたま傍かたわらにいた川端康成さんにこんな風に喋しゃべつたのを思い出す。彼笑つて答えなかったが。「生きている人間などというものは、どうも仕方ない

④代物しろものだな。何を考えているのやら、何を言い出すのやら、仕出来しでかすすのやら、自分の事にせよ他人事にせよ、解わかつた例れいしがあつたのか。鑑賞にも観察にも堪えない。其処そこに行くと死んでしまった人間というのは大したものだ。何故、ああはつきりとしつかりとして来るんだろう。まさに人間の形をしているよ。してみると、生きている人間とは、人間になりつつある一種の動物かな」

この一種の動物という考えは、かなり僕の気に入つたが、考えの糸は切れたままでいた。歴史には死人だけしか現れて来ない。従つて退ひつ引ひきなならぬ人間の相しか現れぬし、動じない美しい形しか現れぬ。思い出となれば、みんな美しく見えるとよく言うが、その意味をみんなが間違えている。僕等が過去を飾り勝ちなのではない。過去の方で僕等に余計な思いをさせないだけなのである。思い出が、僕等を一種の動物である事から救うのだ。記憶するだけではいけないのだろう。思い出さなくてはいけないのだろう。

多くの歴史家が、一種の動物に止まるのは、頭を記憶で一杯にしているので、心を(七)虚しくして思い出す事が出来ないからではあるまいか。

上手に思い出す事は非常に難しい。だが、それが、過去から未来に向ってあめ餡の様に延びた時間という蒼ざめた思想あお(僕にはそれは現代に於ける最大の(八)モウソウと思われるが)から逃れる唯一ゆいいつの本当に有効なやり方の様に思われる。成功の期はあるのだ。この世は無常とは決して仏説という様なものではない。それは幾時いっさい如何なる時代でも、人間の置かれる一種の動物的状態である。⑤現代人には、鎌倉時代の何処かのなま女房ほどにも、無常という事がわかっていない。常なるものを見失ったからである。

(小林秀雄『無常という事』より)

* (注解) 比叡の御社

ひえ日吉山王。現在は日吉大社。滋賀県大津市坂本にあり、比叡山の守護神。さんのおごんげん山王権現ともいう。

かんなぎ

神に仕えて祭りを行い、神楽を奏し、祭りの初めに神おろしなどをする人。特に女性をいう。

なま女房

若い女。

十禅師

日吉山王七社権現の一つ、十禅師社。

しひ問はれて

無理に問われて。

後世

死後の世界。

一言芳談抄

法然、明遍ら、三〇余人の念仏業者の言行を集めた聞き書き集。二巻。編者不明。鎌倉末期から

南北朝期に成立。

坂本

比叡山の東麓、琵琶湖に臨む延暦寺の門前町。

古事記伝

江戸時代中期の国学者、本居宣長の「古事記」の注釈書。四四卷。明和四年(一七六七)頃から

三〇余年をかけ、寛政一〇年(一七九八)に完成した。

問一 傍線部(ア)から(ソ)について、カタカナは漢字に、漢字は平仮名に直しなさい。

問二 傍線部①について、女房の願ったことは何か、説明しなさい。
(四〇字程度)

問三 傍線部②について、山王権現で『一言芳談抄』に美のホウガを感じることができたのはどうしてか、理由を述べなさい。
(四〇字程度)

問四 傍線部③について、「歴史」についての筆者の主張はどのようなものか、説明しなさい。
(七〇字程度)

問五 傍線部④について、「生きている人間」はどういう状態にあると述べているか、説明しなさい。
(五〇字程度)

問六 傍線部⑤について、「現代人には無常がわからない」理由を述べなさい。
(五〇字程度)